

## 今日のキーワード 株式「ボックス相場」での『積立投資』の効果とは・・・

2018年に入って史上最高値を更新し続けている米国株式市場ですが、かつて長期にわたって上値も下値も抜けない「ボックス相場」となった時代がありました。先高期待がなかなか持てないような「ボックス相場」で『積立投資』を行っていたら、資産はどのように成長したのでしょうか？

### ポイント1

## 米国株式市場では約16年にわたる「ボックス相場」の時代があった 1966年から1982年は長期の「ボックス相場」で「株式の死」と言われた

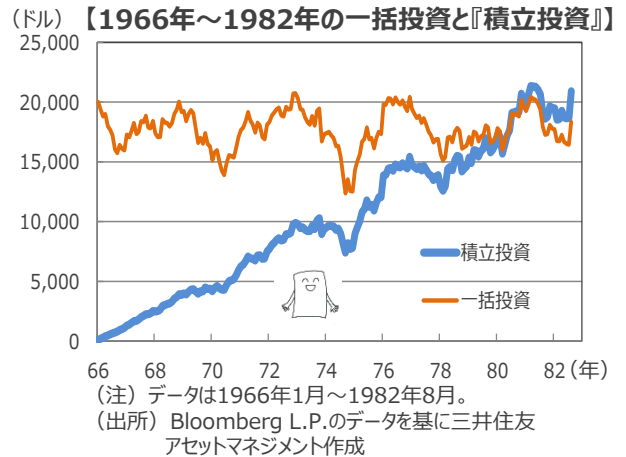
- 米国株式市場は、堅調に推移していますが、過去、長期間にわたって「ボックス相場」で推移していた局面がありました。それは1966年2月から1982年8月までの16年間です。この間、NYダウはほぼ600ドルと1,000ドルの間で推移しました。米国は1960年代から1982年にかけて5回の景気後退局面（全米経済研究所）を迎えるなど経済環境は悪化しました。1979年には株式市場の低迷から「株式は死んだか？」とまで言われました（1979年8月ビジネスウィーク誌など）。その後、米国株式市場はレーガン大統領がとった自由主義経済政策（レーガノミクス）によって、1982年以降飛躍的な上昇相場に入ることとなります。

### ポイント2

## 16年間の「ボックス相場」での投資収益率を比較

### 『積立投資』と一括投資で比較すると・・・

- 仮に、16年間の「ボックス相場」で『積立投資』を行っていたら、資産はどのように成長したのでしょうか？米国が「ボックス相場」に入る直前の1966年1月から株式市場が大きく上昇する前の1982年8月まで米国株式の投資信託に一括投資した場合（1）と、『積立投資』をした場合（2）の投資収益率を比較してみました。
- 投資信託はNYダウに連動し、手数料や税金等は無いと仮定します。投資期間は1966年1月から1982年8月まで（200ヵ月）、投資金額はともに2万ドルとし、（1）は期初に一括投資、（2）は毎月100ドルずつ『積立投資』をします。



### 今後の展開

## 『積立投資』は「ボックス相場」での資産形成に寄与

- 1982年8月末の評価額は概算で、（1）一括投資は1万8,328ドル、（2）『積立投資』は2万906ドルとなりました。当時の米国株式市場は、株価が大きく上下し、また、上値を更新できないような投資環境でしたが、『積立投資』は資産形成に寄与しました。『積立投資』は、価格が下がった局面でも一定額投資し続けるため、その分口数を多く購入できるという特徴があります。『積立投資』は、価格が持続的に上昇しなくても、投資対象資産が下落しても損失がある程度抑えられ、資産形成に効果を発揮できると期待されます。

※上記は一定の前提条件に基づき、過去のデータを用いてシミュレーションを行ったものであり、実際の投資成果ではありません。また、将来の成果を示唆あるいは保証するものではありません。

### ここも チェック!

2018年 1月25日 あの時『積立投資』を始めていたら・・・アジア編

2017年12月11日 あの時『積立投資』を始めていたら・・・米国編

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友アセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。